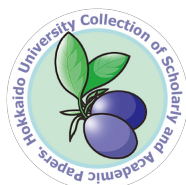




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ダグール語の語彙におけるツングース諸語との共通要素について
Author(s)	風間, 伸次郎
Citation	北方人文研究, 8, 1-23
Issue Date	2015-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58443
Type	departmental bulletin paper
File Information	08_01_kazama.pdf



ダグール語の語彙におけるツングース諸語との共通要素について

風間伸次郎

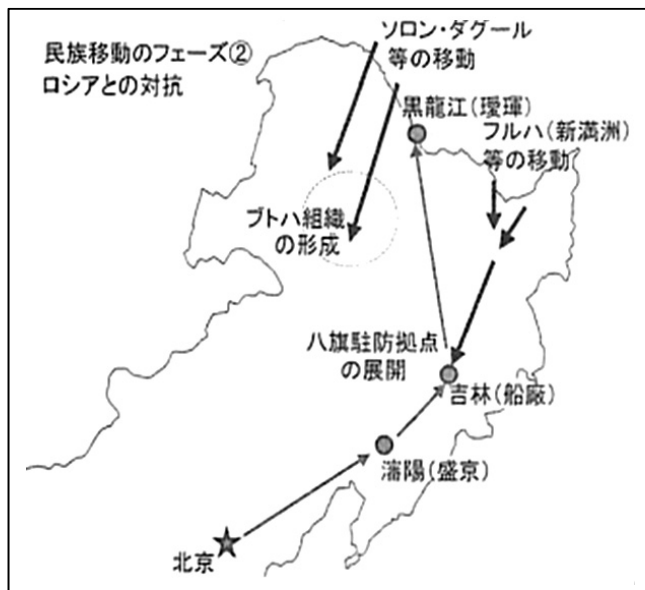
東京外国語大学大学院総合国際学研究院

0. はじめに

本稿では、ダグール語¹の語彙に見られるツングース諸語との共通要素に注目し、それらが、①モンゴル諸語からツングース諸語に借用されたものか、②ツングース諸語からモンゴル諸語（ここでは特にダグール語）に借用されたものか、③どちらとも判断の難しいものか、を検討する。

またこれらの諸要素の検討を通じて、ダグールの故地や、モンゴル諸語とツングース諸語の接触の歴史等についても可能な限り考察を加える。

柳澤 (2009) によれば、次のような歴史的背景により、ダグールはアムール上流域から嫩江流域に移動したものと考えられている。



1640 年代、清朝の入関とほぼ時を同じくして、ロシア人がアムール流域に出現した。彼らは要地に小規模な城砦を築きつつ、現地住民からヤサーク（毛皮税）を取り立て、抵抗を受けた場合は村落を焼き払うなどの強硬手段をとった。こうしたロシア人の活動は、住民の大規模な南下を引き起こした。すなわち、アムール上流域のソロン部など（ロシア側史料ではツングース、ダウール）は大興安嶺～嫩江一帯へ移動してブ

トハ組織に組み込まれ、また中流域のフルハ部（ロシア側史料ではジュチュル）は松

¹ 「ダグール人は、中華人民共和国の内蒙古自治区フルンボイル市や黒竜江省、新疆ウイグル自治区等に居住する民族集団である。2010 年のセンサスによると民族人口は 13 万 1992 人である。ダグール語はモンゴル語族の中で最も東に位置し、他の諸言語・諸方言が失った古風な特徴を保持する一方で独自の改変も多いことから、伝統的に「孤立的言語 (isolated languages)」の一つに数えられている。過去には北方トゥングース系の言語との接触があったと考えられ、清代の行政言語であった満洲語からの語彙借用も顕著である。ダグール語の方言区分は四分論が一般的であり、話者人口順にブトハ方言、チチハル方言、ハイラル方言、新疆方言の 4 方言が区分されている。ダグール人の活動が文献によって知られるのは 1620 年代以降であり、当時は黒竜江上流およびその支流ジンキリ川（ゼーヤ川）に居住していた。17 世紀半ばの清朝とロシアの相次ぐ黒竜江地域への進出により、ダグール人は清朝の治下に入り、対露政策の一環として、現在の居住地域である嫩江（ナウン・ムル）沿岸へ移住させられた。当地域から更にフルンボイル地域や新疆イリ地方へも一部が移住し、現在の方言グループが形成された。」「ブトハ地区からフルンボイル地域へのダグール人の移住は雍正 10 (1732) 年、新疆地域への移住は乾隆 28 (1763) 年であり、(以下略)」(大竹 (2013: 1, 10)より要約)

花江を遡る方向へ移動したのである。ただし、もちろんロシア支配下にとどまった人々もいた。
(図も含め柳澤 (2009: 244) による)

したがってかつてダグールはアムール上流域において、ソロンやエウエンキーの東方言の一部と接触していたものと考えられる。ダグールのこのアムール上流域における故地がどこであったかについては、アムール河上流およびその支流のゼーヤ川とされているが、その広がりについてはなお十分に明らかなではない。本稿では借用語の分析という観点からその地域を推定する。

1. 先行研究

ここでは恩和巴图編 (1988) の語彙についての記述の部分を取りあげて整理し、若干の検討を加えておく。

1.1. ダグール語の語彙全体の構成

1955年の調査で得た2,566語のうち、モンゴル語と同語源のものは1,780語(69.3%)、満洲語と同じもしくは類似したもの144語(5.6%)、鄂倫春語²と同じもしくは類似したもの150語(5.8%)、漢語もしくはロシア語からの借用146語(5.7%, 漢140/露6)、ダグール語固有の語もしくは来現の不明なものは169語(6.6%)であったという。同じく1956年2,000語での調査では、モンゴル語と同語源のものは46.1%、満洲語と同じもしくは類似したもの3.15%、漢語からの借用3.95%、ダグール語固有の語46.8%であったという。

1988年の5,439語の調査では、モンゴル語と同語源のものは2,502語(46%)、満洲語と同じもしくは類似したもの681語(12.5%)、漢語からの借用457語(8.4%)、ダグール語固有の語1,791語(32.9%)であったという。

したがって3度の調査の結果を総合すると、モンゴル語と同語源のものは46-69.2%、満洲語と同じもしくは類似したもの3.15-12.5%、漢語からの借用3.95-8.4%、ダグール語固有の語6.5-46.8%であったという。

著者の恩和巴图は自身の研究の蓄積から、モンゴル語と同語源のものは50%以上、(満洲語を含む) ツングース諸語と同じもしくは類似したもの10%前後、ダグール語固有の語20%以上と見積もっている。以上は恩和巴图編 (1988: 485-486) による。

ここで問題なのは1回目の1955年の調査を除き、鄂倫春語を含むエウエンキー語と同じもしくは類似したものに注意が払われていない点である。上記のような数値の大きな食い違い(特にダグール語固有の語の数値)は、この点に起因していると考えられる。1955年の調査で見いだされた鄂倫春語と同じもしくは類似したもの150語の具体的な内容については、恩和巴图編 (1988) には記されていない。

² 「より一般的な観点からは、鄂温克族の一部と鄂倫春族の言語はエウエンキー語に含まれ、鄂温克族の大半の言語は実際にはソロン語として分類される。」(津曲 (1996: 178), なお鄂倫春語の諸方言やその詳しい分布等については、池上 (1989: 1059)も参照されたい。)

1.2. 満洲語を含むツングース諸語との同語源語もしくは借用語

まず次のような語は基礎語彙であって借用によるものとは考えにくいとしている(以下 ダグール語 / 満洲語 でその形式を示す): *bii* / *bi* 「私」, *šii* / *si* 「おまえ」, *xulaan* / *fulgiyan* 「赤」, *omul* / *omolo* 「孫」, *aiš* / *aisi* 「利益」, *čuləə* / *šolo* 「暇」, *aγ* / *ahūn* 「兄」, *dəu* / *deo* 「弟」(恩和巴图編 (1988: 501))。

さらに次のような語をあげた上で、同語源語であるか借用語であるかの判断は難しいが、借用語とみなせるものは別項に示す、としている: *ardii* / *akjan* 「雷」, *xakur* / *fakūri* 「ズボン」, *guu* / *gu* 「玉、ガラス」, *xal* / *hala* 「姓、大きな氏族」, *mokun* / *mukūn* 「氏族」(恩和巴图編 (1988: 501))。

したがって、恩和巴图編 (1988) はモンゴル諸語とツングース諸語を同系とみた上で、上記の語はその祖語に遡る語とみていることになる。

これに対し、ツングース諸語からの借用については、まず満洲語と鄂温克語と鄂倫春語が互いに似ているために、どの言語からの借用であるか判断するのが難しいとした上で、次のような語をあげている(ダグール語の語形のみを示す、なお満洲語からの借用については多数であるため省略する)。

・鄂温克語から入ったもの: *jəəkə~iikə* 「鍋」, *baroolč* 「柄杓」, *doo* 「川」, *əryəl* 「牝牛」, *am'naan* 「雄鶏」, *ənəən* 「雌鶏」, *nannaakən* 「美しい」, *abyər* 「健康な」(恩和巴图編 (1988: 514))。

・鄂倫春語から入ったもの: *əñəən* 「ノロジカ」, *nikčaa* 「ジャコウ」, *pəntuu* 「シカの袋角」, *juurməən* 「2本に枝分かれしたシカの角」, *jalərmaan* 「3本に枝分かれしたシカの角」, *aabkaat* 「若いブナの木」, *bainaačaa* 「山の神」(恩和巴图編 (1988: 514))。

鄂温克語から入ったものには日常生活に関連する語が多く、鄂倫春語から入ったものには狩猟に関連する語が多いとしている。

以下、本稿で見るように、ツングース諸語、特に鄂倫春語を含むエウエンキー語から入ったと思われる語は他に非常に多く存在する。恩和巴图編 (1988) では、ロシア領のツングース諸語に関する情報が得にくい状況であったために、それらの借用語が十分に把握できなかったものと思われる。

1.3. ダグール語固有の語としているもの

ダグール語固有の語として、次のような8つの分野にわたる語彙を示している。

①各種の魚(12語)、②漁撈の方法や道具(15語)、③狩猟や獣皮に関する語彙(11語)、④鷹狩りに関する語彙(6語)、⑤農業に関する語彙(8語)、⑥食品の名称(5語)、⑦宗教信仰に関する語彙(12語)、⑧スポーツや娯楽に関する語彙(4語)

しかし、このうちの次のような語は少なくともツングース諸語に見いだされる。

mukčəən 「フナ」 ①|| ソロン語 *muxusəən*

lay 「ナマズ」 ①|| ナーナイ語、ウルチャ語、ウイルタ語に *laxa*

pəntuuməə- 「シカの袋角を狩る」 ②|| ナーナイ語に *pəntuməsi-*

tooroo 「シャーマンの柱」 ⑦|| 本稿 3.3.1. 参照

kəŋg^wrəən~kəŋgwrəŋkw 「スキーの板」 ⑧|| 本稿 3.3.1. 参照

したがってやはり 1.1. で考察したように、ダグール語固有の語とみているものの中には、ツングース諸語からの借用の検討が不十分であったものが多く含まれているものと考えられる。モンゴル諸語におけるダグール語の特異性・重要性は言うまでもないが、モンゴル祖語に遡りかつダグール語のみ（もしくはダグール語と他のわずかな言語のみ）が保持している語彙等を研究するためには、まずツングース諸語からの借用について十分に検討しておくことが必要不可欠であるといえよう。

2. 研究方法

まずダグール語-漢語辞典である恩和巴图 (1983) から、筆者の判断でツングース諸語でも用いられていると思われる語を抽出した³（以下「共通語彙」と呼ぶ、本稿では太字で示している）。

なお恩和巴图 (1983) は、ダグール語のうちでもブトハ方言に基づいている。ブトハ方言は、ハイラル方言とは違い、現在ソロン語やモンゴル語との接触からは切り離された状態にある。なおダグール語の表記は基本的に恩和巴图 (1983) に基づいているが、その表記は漢語の拼音をベースにしているため、次のような若干の変更を行った： $e > \text{ə}$, $q > \text{č}$, $j > \text{j}$, $x > \text{š}$, $y > \text{j}$ 。

次に、やはりダグール語の語彙集である恩和巴图等編 (1984) により、上記の語についての記述を参照した。恩和巴图等編 (1984) もブトハ方言に基づいており、収録されている語彙は恩和巴图 (1983) とほぼ共通している。しかし恩和巴图等編 (1984) には、「鄂温克:（ここでは実質的にはソロンを指しているものと考えられる）」、「鄂倫春:」、「満（洲）:」、「漢:」と、借用元についての注記が記されている。さらに、対応するモンゴル文語の存在する語については、いわゆる縦文字によって文語形も示している。以上の情報に基づいて、次に上記の共通語彙を下記の6つのグループに分類した:

- A. （恩和巴图等編 (1984)において）鄂温克から借用したとされているもの
- B. （恩和巴图等編 (1984)において）鄂倫春から借用したとされているもの
- C. （恩和巴图等編 (1984)に）借用元の記載が無く、モンゴル文語の対応形も記されていないもの
- D. （恩和巴图等編 (1984)において）借用元の記載が無く、モンゴル文語の対応形が記されているもの
- E. （恩和巴图等編 (1984)において）満洲語から借用したとされているもの
- F. （恩和巴图等編 (1984)において）漢語から借用したとされているもの

次に共通語彙について、そのツングース諸語での分布を知るために、ツングース諸語の比較辞典である Tsintsius et al. (1975, 1977) を参照し、各語彙項目ごとにそのツングース諸語内部での分布を示して検討した。特にエウエンキー語に関しては、（記載のある

³ むろん筆者はツングース諸語の語彙全てに通じているわけではないので、その抽出は恣意的であり、見落としているものも存在するだろう。ダグール語においては大きく異なった形に変化してしまったため、筆者には気付かなかった要素もあるだろう。しかし筆者でもすぐにツングース諸語に存在すると判断できるような語は、ツングース諸語において比較的頻度も高く重要な語であると考えられる（筆者は25年にわたりツングース諸語の大部分について研究を重ねて来ている）。ダグール語にはこのような語彙がかなり存在することがわかったので、報告する価値があると考え、本稿にまとめることにした。

場合に)それがどこの方言であるかも示した(ただしこれに関しては Tsintsius et al. (1975, 1977)の記載が複雑であるために、特に動詞については不十分にしかできなかった面がある、より精密な分析は今後の課題としたい)。諸言語および諸方言に用いた略号は次の通りである(略号の大部分は Tsintsius et al. (1975, 1977)のものにしたがった)。なおツングース諸語は I~IV 群に分類されている(下記の分類は Ikegami 1974 に風間の見方を加味したものである。風間 1996 参照)。

・ ツングース諸語・諸方言

I 群 : (Ek)エウエンキー語; (Ew)エウエン語; (S)ソロン語; (N)ネギダル語; (Na K-U)ナーナイ語クル・ウルミ方言;

II 群 : (Oc)オロチ語; (U)ウデヘ語; (Hz)ヘジェ語;

III 群 : (Ut)ウイルタ語; (Ul)ウルチャ語; (Na)ナーナイ語; (Na Bk)ナーナイ語ビキン方言;

IV 群 : (Ma)満洲語; (J)女真語

・ エウエンキー語の諸方言

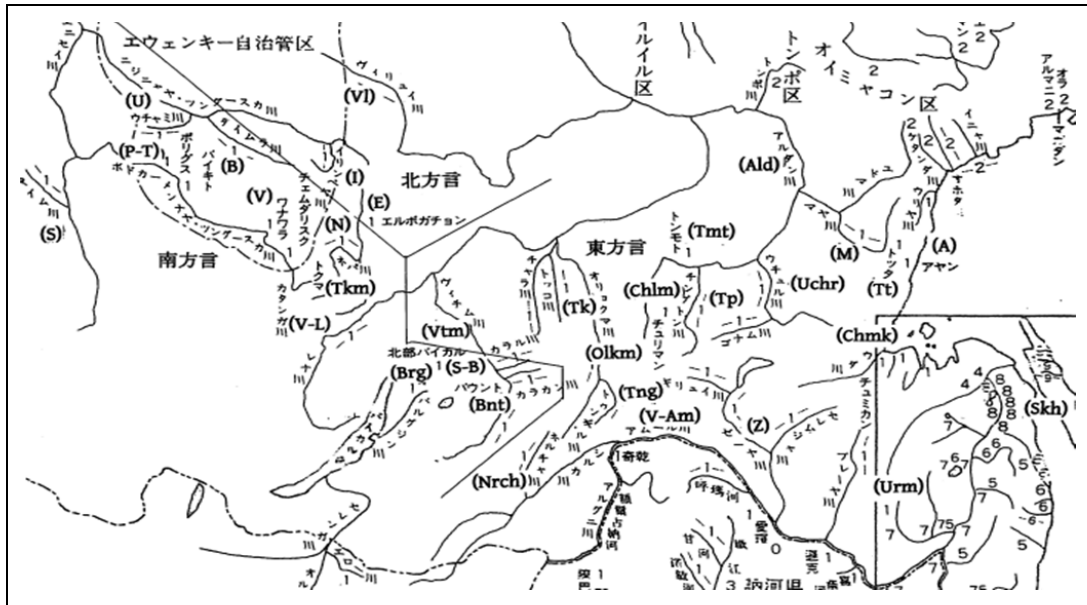
北方言 : Ag アガティ・バリショイパローガ; D ドウジン; E エルボガチャン; I イリンピ; Nak ナカンノフ

南方言 : B バイキット; Bnt バウントフ; Brg バルグジン; V ワナワル; V-L ヴェルホレンスク; N ネブ; P-T ポドカーメンナヤ ツングースカ; S スィム; Tkm トクミン; U ウチャム

東方言 : A アヤン; Ald アルダン; V-Am アムール上流; Vl ヴィリュイ; Vtm ヴィチム; Z ゼーヤ; Kch カチュグ; M マイ; Nrch ネルチン; Olkm オリョクミン; Skh サハリン; Tk トッキン; Tmt トンモット; Tng トウンギル; Tp チンプトン; Tt トッティン; Urm ウルミ; Uchr ウチュル; Khng ヒンガン; Chlm チュリマン; Chmk チュミカン

・ ツングース諸語以外の言語

{P.Mo} モンゴル文語; {sr.Mo} 中期モンゴル語; {M} モンゴル語; {Bur} ブリヤート語; {K} 朝鮮語; {dr.Tjurk} 古代チュルク語; {Jak} サハ語;



地図 1: エウエンキー語諸方言の分布(池上(1989: 1060)をもとに作成した、なお上記の方言のうちのいくつかについては、十分にその場所を特定できなかった)

3. 分析

Tsintsius et al. (1975, 1977) もしくは他の文献からの情報を [] 内に示した。また場合によっては、必要に応じてそこに明かな形で適宜筆者の分析を書き加えた。Tsintsius et al. (1975, 1977) において、形や意味がダグル語とほぼ同じである場合には、特に形式や意味を再度記すことはしていない。Tsintsius et al. (1975, 1977) の見出し語(主に(Ek)の語形を採用している)は斜字体で示した。恩和巴图等編(1984)記載の文語形は、【 】内に示した。「全ツングースにある」という場合、それは Tsintsius et al. (1975, 1977) で(Ek) (Ew) (S) (N) (Oc) (U) (Ul) (Ut) (Na) (Ma) (J) 全てに語形の記載があることを示す。

以下では共通語彙の A. ~F. について、3.1.~3.6. で順に検討していくことにする。

3.1. 「鄂温克:」と記載のあるもの (A.)

「鄂温克:」と記載のあるものは少なく、下記に示したもののみである。

ここには主に親族名称、遊牧の生業と関連する語彙が見出される。

aĭ 「妻の姉」[Tsintsius et al.(1975, 1977)に記載なし(以下「記載なし」とする)。]、**aošia** 「姉の夫」[(Ek: Ald, V-L, Z, S, Skh, Tng, Uchr, Khng, Chmk, Tit) *awus*, (N), (Oc), (U), (Ul), (Na).]、**bənar** 「妻の妹、妻の弟」[(Ek: Brg, V-L, S-B, Urm, Khng) *bənar*, (Ew), (N), (Oc), (U), (Ul), (Na)にある。さらに{K} *myeneuri* 「嫁」が比較されている。]

ərgəl【*üker*】「(去勢した)オス牛」[(Ek: Ald, Brg, Z, Kch, Tp, Uchr, Khng) *hukur*, *oyus* < {*Jak*}, (S) *uxur* 「角のある家畜、オス牛」, *əggəəl* 「去勢牛」]、**doo** 「水や草のある土地」[(Ew)(Ut)]

baar「満一年、満一歳、誕生日」[記載なし。]、**baaralbai**⁴「満一歳になる、誕生日になる」[記載なし。]、**baani**「雹」[(Ek) *boona*, (Ew)を除く全ツングースにある。]

このうち、**aošia**, **bənar**, **baani**はおそらくツングースよりダグールに入ったものだろう。**ərgəl**, **doo**, **baar**, **baaralbai**に関しては、はっきりしたことが言えない。

3.2. 「鄂倫春:」と記載のあるもの (B.)

鄂倫春語からの借用に関しても記載は少ない。後述のように、鄂倫春語をはじめとするエウエンキー語諸方言から借用したと思われる語はかなり大量にあるので、恩和巴图等編 (1984) は十分な検討を行ったとは思えない。ツングース諸語の語彙についての十分な知識がなければ、話者の内省もしくは特定の意味分野の語であること以外にその来源を知る根拠は乏しく、その判断は難しかったものと想像される⁵。

ここにはもっぱら狩猟に関する語彙が見出される。

bainaačaa「狩猟の神、山の神」[記載なし。]、**ətarkəən**「クマ、母グマ」[(Ek) *ətirkəən*「おじいさん」。(Ek: Brg, Nrch, Urm) *ətirkuu*「クマ」, (S), (Ew), (N), (U) *əkčə*「従兄弟」, (Na) *əksən* (< *ətikən*)「おじ」, (Ma), {P.Mo} *əčigə*「父」]、**pəntuu**「シカの袋角」[(Ek: Z, M, S-B, Urm, Uchr, Khg) *pəntu*. (Oc), (Ul), (Na), (Ma)]、**pəntuuməəbai**「袋角を持つシカを狩る」[(Na) *puntuməsi*-「アカシカを狩る」]、**tatandaa**「狩猟の長、野営の長」[(Ek: Ald, A, Z, Skh, Tmt, Tt, Urm, Uchr, Chmk) *tat*-「慣れる」⁶。 *tatkaamjuu*「先生」、**čikaamii**「チカミー(ノロジカの足の皮製の底の柔らかい靴)」[(Ek: M, Z, S, Tt) *čikaa*-「切り取る」。(Ew), (N), (Ut)]

juurməən【*jirmüsün* (なお *jirmüsün* は「妊娠した」の意である)「2本に枝分かれたシカの角」[(Ek) *juur*「2」。(Ek: Z, Skh, Tng, Urm, Uchr, Chmk) *juurməən*「二重の」]、**jalarmaan**「3本に枝分かれたシカの角」[(Ek) *ilan*「3」, (Ek: Ald, Z, Skh, Tng, Urm, Uchr, Chm) *ilarman*「三列の、三層の」]、**jallaan pəntuu**「骨がむき出しのシカの角」[記載なし。]

これらの語彙は(Ek)からダグール語に入ったものとみてよいだろう。

なお **pəntuu**「シカの袋角」はロシア語でも *panty* である。これがツングース諸語(のいずれか⁷)からロシア語に入ったのか、他の民族からツングース諸語とロシア語にもたらされたのかは不明である。

⁴ *baaralbei* は *baaral*-までが語幹で、*-bei* は動詞の現在・未来形語尾(栗林 (1989: 602))である。恩和巴图等編 (1984)では、この現在・未来形を動詞の見出し語形としているため、本稿もこれに倣い、動詞は現在・未来形で示す。

⁵ ただし、17世紀にダグールが嫩江に移動した後、嫩江上流の鄂倫春と接触して借用した語彙に限るならば、このようにわずかな語彙に留まるのかもしれない。しかし鄂倫春はアムール対岸のエウエンキーとほとんど同じ言語であるので、話者が内省によって「どの語彙が鄂倫春起源である」と特定しない限り、鄂倫春由来の語彙のみを別個に取り出すことは難しいと思われる。

⁶ ただし{M}にも *dad*-「慣れる、経験を積む」がある(小澤 (1983: 122)、査読者の御教示による)。

⁷ 以下ではこの「のいずれか」を省略する。したがって「ツングース諸語からモンゴル諸語に入った」のような表現は、「ある時期にツングース諸語のいずれかからモンゴル諸語のいずれかに入った」ということを意味するものとして了解されたい。

3.3. 借用元の記載は無く、モンゴル文語の対応形も記されていないもの (C.)

ここにはかなり基本的な語彙が多く現れるので、ツングース諸語とダグール語の間に長期間にわたる密接な接触があったことは明らかである。この共通語彙の大部分は、ツングース諸語における分布とその基本的な語義から考えて、ツングース諸語からダグール語に入ったものとする。ただし一部には逆にダグール語、もしくはかなり古い時代にモンゴル諸語からツングース諸語に入ったと考えられるものも存在する。

借用の意味分野を把握するために、以下ではさらに、3.3.1. 名詞類、3.3.2. 動詞類、3.3.3. 形容詞・副詞類、3.3.4. 擬音語・擬態語、に分けて考察する。

3.3.1. 基本的な名詞およびその派生語

名詞には、身体部位名称、親族名称・地位名称、動植物や地形の名称、狩猟やシャーマニズムに関する名称、その他、が見出された

・身体部位

sarmilt「眉毛」[(Ek) *sarimi*-「まばたきする」。(Ek: P-T, Ald, Brg, N, Tk, Urm, Chlm) *sarimikta*, (J)を除く全ツングースにあるが、{P.Mo} *sormusun*「まつ毛」も比較されている。(S)の語形は *sammikta*~*sammitta*~*sarmilta* となっており、ダグール語の語形と最もよく似ている。]

-*hta* は多数性を示す名詞接辞と考えられるので、ツングース祖語に遡る語であると考えられる。祖形はおそらく **sar(i)mikta* で、(Ek)の動詞 *sarimi*-「まばたく」に由来するとすれば、元の意味は「まつ毛」であったのではないだろうか。その後「眉毛」との混同、もしくはそれに伴う意味変化が起きたものと考えたい。

・親族名称や地位名称など

amaa「父親」、**aminaan**「(獣や鳥に関して) オスの」[(Ek) *amaa*。全ツングースにある、(Ek: Skh, Urm) *amnan*「ライチョウのオス、鮭のオス」, (Ew), (N), (Oc), (Ut), (Na)], **bənəəsul**「女性たち、妻たち」[2.1. の *bənər* で見たように、「妻の兄弟(姉妹)」の意味の語 *bənər* 及びその同源語が広くツングース諸語に存在する。]、**əukəə**「父のいとこ、母の兄」、**əukəən**「夫」[(Ek) *əbəkəə*「祖母」。形の上では良く対応する語が、(Ew), (S)を除く全ツングースにあるものの、意味が対応しない点に注意が必要である。(Ek) *əwəkəə*「母方の祖母、父母の姉」, (Na) *əukə*「兄の嫁 etc.」のようにツングース諸語では女性の親族である。もっとも親族名称の指示対象が借用の過程で異なったものとなる可能性は十分に考えられよう。]

domol「ひ孫」[Sem (1976: 153) によれば、(Na Bk)にのみ *domoli*「ひ孫」がある。なお **omol**「孫、弟／妹の子」は、「2.5. [満洲語:] の記載のあるもの」に記した]、**kəmul**「玄孫(やしゃご)」[やはり Sem (1976: 165) によれば、(Na Bk)にのみ *komoli*「ひ孫」がある。]、**šomol**「玄孫(やしゃご)」[記載なし。]、**jui**「甥、姪」[(Ma), (J)にのみ。漢語の「子³」が比較されている。]

上述のように *domol* と *kəmul* は対応する語が (Na Bk) にのみ存在する。(Na Bk) は風間 (1996: 134) で述べたように、(Na K-U)および(Hz)とともにアムール中流域文化圏を形成する。ダグール語はこのアムール中流域文化圏との交流を持っていたことが考えられる。*juj*「甥、姪」は明らかに満洲語から入ったものと考えられる。恩和巴图等編 (1984) が「満洲語:」の記載をし忘れたものではないかと思われる。なお {M} にも *zee*「甥、姪、孫」({P. Mo} *jige*, 小澤 (1983: 202)、査読者の御教示による) がある。

and「狩猟の仲間」[(Ek) *anda*. (Ew)と(S)を除く全ツングース、{P. Mo} *anda*「仲間」]
əjin「主人、皇帝」[(Ek) *ədii*「夫」。全ツングースにあるが、{P. Mo} *ejen*「主人」をはじめとするモンゴル諸語の形が比較されている。(Ek: Ald, Brg, V-L, Btm, Z, Nrch, S-B, Skh, Tng, Urm, Uchr, K) *əjən*.], **kongoo**「つんぼ」[(S) *xongoo*, (N), (Oc), (Ul), (Ut), (Na)にあり、(S) *xongo* を除き形はみな *kongo* で、意味はみな「つんぼ」である。-ng- が I・II 群で III 群と同様に変化を受けていない点から見て、ツングース本来の語ではないと判断できるが、{P. Mo}などの形も上がっていない。(Ma)にもなく、(Ma)からアムール下流へと広がったものと考えられることもできない((Ma)には *dutu*「つんぼ」という語が見出される。)]

and と **əjin** については、古くにモンゴル諸語からツングース諸語に入ったものと考えたい。**kongoo** については、古くからのモンゴル語をダグール語のみが保存している例ではないだろうか⁸。そこからアムール下流域に広まったものと考えたい。

・動植物および地形

gaaran「樹の枝、柱」[(Ek) *gara*. 全ツングースにあり、もっぱら枝の意味だが、ツングースの祖形はおそらく *gara* で、語末に *n* が無く、母音の長短も対応しない。{P. Mo} *yar* が比較されているが、意味は「手」である。], **ataakii**「クモ」[(Ek) *atakii*. (U), (Ma), (J)以外の全ツングース], **ukčəən**「メス犬」[(Ek) *ukučəən*. (S), (J)を除く全ツングースにある。(Ek)の諸方言形は最も近い形(*ukučəən*~*ukəčəən*~*ukəčən*~*ukəs'on*)を示している。], **baakčaan**「島」[(Ek) *bukačaan*. (S), (N), (Ma), (J)以外にほぼ似た形で「島」を意味する語がある。(Ma) *bukša* は「森の中の木のない所、雪が融けて地面の現れたところ」となっている。(Ek: Uchr, E, S-B, Skh, Urm, Chmk, S).], **dərəən**「水源地、上流」[(Ek) *dərəən*. (Ma), (J)以外の全ツングースにある。(Ek)で *dərəən* の語形を持つのは、P-T, Ald, E, N, Skh, Tng, Urm, Uchr 方言である。], **kakraa**「ニワトリ、干支の酉」[(S) *xaxraa* があるのみである。]

gaaran「樹の枝、柱」の形が厳密に対応しないのは問題だが、**kakraa**「ニワトリ、干支の酉」以外は全ておそらくツングース諸語からの借用であろう。

⁸ 「つんぼ」は {M} *dulij*, {P. Mo} *dültüi* で、孫竹主編 (1990: 244)によれば他のモンゴル諸語および諸方言でもこれと同源の語が用いられており、*kongoo* はダグール語にのみ見いだされる。{M} *xongil*, {P. Mo} *qonggil*「岩や木のうつつろ・くぼみ・小穴、家屋の通路・廊下、耳の穴」(小澤 (1983: 474)) という、語形は類似するが意味は全く異なる語があり、モンゴル諸語・諸方言に広く観察されるので(孫竹主編 (1990: 364))、古くからのモンゴル語とみるには問題があるかもしれない(査読者の御教示による)。しかしここではツングース諸語における分布から推測される 1つの可能性として提示しておくことにする。

・狩猟に関する語彙

atirkaan 「オスのクマ」 [(Ek) *ati* 「老婆」。(Ek: Z) *atirkaan* 「クマ」、同源語は(Ul), (Na), (J)を除いて広くあるが、主に I 群に存在し、(Ek)で *atirkaan* は「老婆」などの意味なので性別は逆である。]、**kənguləən** 「スキーの板」 [(Ek) *kiŋləə*。(S), (Ma), (J)以外の全ツングースにある。(Ek)で *kiŋləə* の形を持つのは、P-T, Ald, Z, N, Nrch, Uchr, Chlm である。]

・シャーマニズムに関する語彙

gisoor 「シャーマンのタイコのパチ」 [(Ek) *gis*。(U)以外の全ツングースにある。(Ek: P-T) *gisu*, (S) *gisūū*, (Na) *gisil* と形は完全には対応しない。(Ek: P-T, Ald, Z, N, Urm, Uchr, K, S, S-B, Tit, Nrch)。]

tooroo 「シャーマンの用いる神の柱」 [(Ek) *туру* 「柱」。(Ew), (U)を除く全ツングースにあるが、{P.Mo} *tura* 「要塞、城、街」、{dr.Tjurk} *tur-* 「立つ」なども比較されている。ツングースの諸形は *туру~tura* である。]、**moliəbəi** 「シャーマンが神のお告げを示す」 [(Oc) *məu~məwu-*, (Ul), (Ut), (Na)に「シャーマンする」が分布する。これは対応する語とみるべきか、はっきりしない⁹。]

上記の狩猟及びシャーマニズムに関する語彙のうち、**kənguləən** 「スキーの板」と **tooroo** 「シャーマンの用いる神の柱」に関しては、ツングース諸語からの借用とみてよいだろう。狩猟やシャーマニズムなどの文化においては、少なくともモンゴル諸語のうちのダグールより、近隣のツングースの文化の方が成熟していたことが窺われる。

・より抽象的な意味の語彙

madan 「末端、末尾、終わり」 [(Ek) *mudan*。(Oc), (Ut), (Ma), (J)を除く全ツングースにある。母音が少し異なっており、ツングース諸語ではもっぱら *mudan* のような形で現れている。]、**kaltag** 「半分」 [(Ek) *kaltaka*。全ツングースにあるが、{P.Mo} *xaltas*, {M} *xaltas* も比較されている。]

madan 「末端、末尾、終わり」はツングース諸語よりダグール語に入ったものと考えられる。**kaltag** 「半分」については、語末の *-g~k* || *-s* の違いについて、考察した上で結論を出す必要があるが、今後の課題としたい。

3.3.2. 基本的な動詞およびその派生語

ačbəi 「合っている」、**ačinabəi** 「合う、沿う」 [(Ek) *arča* 「出会い」。(J)を除く全ツングースにあるが、I 群では *arča-* ((N)は *alča~atča-*) である。(Ma) *ača-* から入ったものだろうか?]、**bəičbəi** 「狩りをする」 [(Ek) *bəjuu-*。(Ma), (J)を除く全ツングース]、**guǰəənəbəi** 「かわいそうに思う」、**guǰəjəə** 「かわいそうな」 [(Ek) *guǰəj* 「美しい」。(Ma)以外の全ツングースにある。ただし(Ek) *guǰəj* 「美しい」、(S) *guǰəən-* 「愛する」など、I 群の言語での意味は若干異なっているようだ。しかし風間・トヤー(2011: 36)には、(S)に *guǰəjee*

⁹ {M} *bööl-*, {P. Mo} *bögele-* 「シャーマンが巫術を行う、占う、歌う」もある(小澤(1983: 63)、査読者の御教示による)。

「かわいそう」を記録している。II・III 群での意味は対応するが、上述のように(Ma)にないので満洲語からアムール下流へ広まったとは考えられない。], **guuruubai**「理解する、わかる」、**guuruul**「理解力、知力、知覚」[(S)にのみある。周辺モンゴル諸語でも使用されている(山田洋平 p.c.)], **ilaan**「光、光線、灯り」[(Ek) *ila-*「火を点ける」。(Ew), (J)を除く全ツングースにある。(Ek), (S)には *ilan*, *ilāa* で「光」の記載があるが、他の言語ではもっぱら動詞としての記載のみである。], **tatbāi**「引く、引っ張る」[(Ek), (Oc), (Ul), (Na), (Ma), (J)にあるが、(Ek)の諸形はモンゴル諸語から入ったものと記されている。{P.Mo} *tata-*「引っ張る」が記載されている。], **jaandaabai**「(民間の)歌を歌う」[(Ek) *jaandaa-*, (S) *jaandaa-*, (Ew) *jooonti-* にのみ記載がある。]

最後の **tatbāi**「引く、引っ張る」と **guuruubai**「理解する、わかる」以外の上記の動詞は、ツングース諸語からダグール語に入ったものとみることができよう。**tatbāi** は、上記の分布から見ても、モンゴル語から満洲語に入り、アムール下流へ広まった語であると考えられる。**jaandaabai**「(民間の)歌を歌う」は漢語起源で、モンゴル語で動詞化されたものだろうか([唱 *chang*⁴ (歌)]、ただしこれが起源であるとすれば、有気音を有声音で借用したことになる点が問題である)。**guuruubai** については、なお今後の研究を要する。

3.3.3. 基本的な形容詞および副詞

tənnən「まっすぐな」[(Ek) *toŋno*. (Ew)を除く全ツングースにあり、意味はもっぱら「まっすぐな」だが、形式は大部分が *toŋdo*~*tondo* である。(S)も *tondooxō*, (Ma)も *tondo* である。*toŋno* の語形は、(Ek: P-T, E, Z, I, N, Nrch, K)に観察される。しかし *nannaakan*「美しい」の対応語が (S) *nandaaxan* だけであったことを考えると、この *d>n* の変化はダグール語の後代の歴史において起きたことかもしれない。], **baraan**「多い」[(Ek) *baran*. I 群の諸言語と(Ut), (Ma)に分布する。他に{Bur} *baran*, {dr.Tjurk} *barin*, *baru* を比較しているが、意味は共に「全部」である。(Ek: P-T, Ald, Z, Nak, Skh, Urm, Uchr, Chmk).], **əlkəə**「容易な、易しい」[(Ek) *əlkə*「注意深い」。(Ew), (J)以外の全ツングースにあり、意味は「静かな〜ゆったりした〜注意深い」である。(Ma)では「平和、平穏」で、{P.Mo} *engke*「静けさ、平和」も比較されている。] **nannaakan**「美しい」[(S) *nandaxaanji*「良く」。(S), (Ew), (N), (Ul), (Ut)に対応する語があるとしているが、形・意味共によく対応するのは(S) *nandaaxan* のみである。], **šak**「全部」[これに対応する語がアムール中流域言語圏に独自に分布することは、風間(1996: 134)に述べたとおりである((Hz) *siakdu*, *xiaok*, (Na Bk) *s'æəxo*{K}~*s'oxo*, (Na K-U) *s'axu*)。しかし Tsintsius et al.(1975, 1977)にはなぜか記載がない。]

まず **tənnən**「まっすぐな」はツングース諸語からダグール語に入ったものと考えられる。3.5. で見るように、さらに **tond**「まっすぐな、忠実な」が満洲語からの借用語としてあがっているが、これについては、まず、より古い時代にエウエンキー語より **tənnən**「まっすぐな」を借用し、しかる後にさらに満洲語から **tond**「まっすぐな、忠実な」を借用したものとする。

次に **baraan** 「多い」は、ツングース諸語内部での分布はやや限られているが、I 群の言語で生まれ、そこからダグール語、ウイльта語、満洲語に入った語ではないだろうか。、**alkəə** 「容易な、易しい」は、古くにモンゴル諸語からツングース諸語に入った語かもしれないが、その後にダグール語がツングース諸語より逆輸入した語ではないだろうか。これらに対し **nannaakan** 「美しい」は、もっぱらソロン語とダグール語にのみ共有されている語彙のようであり、どちらで生まれどちらに入ったのか不明である。

副詞 **šak** 「全部」は、再びここでもダグール語のアムール中流域言語圏との接触を示唆している。

3.3.4. 擬音語・擬態語

kəpər kəpər 「大根を食べる時などの音」[(N) *kəpur kəpur*, (Oc), (U), (Ut), (Na)にある。]、**saar saar** 「砂の」[(Ek) *sarkama* 「柔らかい、もろい」。(Ew), (U), (J)以外の全ツングースに同源語があるが、多くは「バラバラに」などの意の擬態語である。対応するかどうかは定かではない。]、**tiak tiak** 「がっちり」と[(N) *teenj teenj*, (Oc), (U), (Ul), (Ut), (Na)に分布する。(Na)にのみ *tiak tiak* のような連母音が観察されるが、他の言語は *teenj teenj* のような語形である。]

この3語は、いずれもツングース諸語内部での分布が偏っており、特に **kəpər kəpər** と **tiak tiak** はアムール河流域からサハリンに続く地域に限られている。したがってツングース諸語が近隣の言語より借用し、それがアムール下流へ広まったものと考えることができる。

エウエン語にはオノマトペがきわめて少なく、テキストでもほとんど観察されないもので、II・III (・IV)群のツングース諸語はモンゴル語からの借用をはじめとする影響のもとで擬音語・擬態語の使用を拡大してきたものと考えられる。上記のような語はその例の一部とみなせるのではないだろうか。

3.4. 借用元の記載が無く、モンゴル文語の対応形が記されているもの (D.)

ここには親族名称や動植物などの具体的な概念は少なく、抽象的な意味の語彙や、進んだ文化要素や異なった文化要素の流入として考えられる語彙が多い。基本的にここに属する語彙はほとんどモンゴル諸語からかなり古い時代にツングース諸語に入った語彙と考えることができる。以下ではやはり、3.4.1. 名詞類、3.4.2. 動詞類、3.4.3. 形容詞類および副詞類、に分けて検討する。さらに、3.4.4.で「むしろ古い時代にツングース諸語からモンゴル諸語へ入ったと考えられるもの」を、3.4.5.では「モンゴル諸語からソロン語のみに入ったと考えられるもの」を別扱いにして検討する。

3.4.1. 名詞類

・身体部位

bəj 【bey-e】「体」[(Ek) *bəjə* 「人間」。全ツングースにあるが、{P.Mo} *beje(n)* 「体」があがっている。]、**horoo**【quruGu】「指」[(Ek) *huruyun*。全ツングースにあるが、{sr.Mo} *heregei*,

{P.Mo} erekei (いずれも)「親指」があがっている¹⁰。もっとも近い語形は(Ek: Ald, Skh, Urm, Uchr, Chlm) huruyun「親指」である。]

・親族名称

huad【quda】「男の親戚」[(Ek) *kuda*, (N), (Oc), (Ul), (Na), (Ma), (J)にあり、もっぱら「妻や妹の夫の親族のうち、自分より年上の者」を広く指す語のようであるが、{P.Mo} *xuda*「仲人、娘の父親、名付け親」もあがっている。(Ek)の語形はもっぱらモンゴル語からの借用であると記されている。]、**noon**【nuGun】「息子、年長者が下の者を呼ぶ語」[(Ek) *nakuun*「年下の親族」。全ツングースにあるが、{P.Mo} *noko~noxo*「若者」があがっている。]、**mərgən**【mergen】「狩人、民話中の英雄（ムルゲン）」[(Ek) *mərgənčii*. (Ew), (J)以外の全ツングースにあるが、{P.Mo} *mergen*「狙いの正確な射手」があがっている。]

・動植物および自然物

mori【mori】「馬」[(Ek) *murin*。全ツングースにあるが{P.Mo} *morin*がある。]、**mowo**【moGui】「へび」、**saajig**【šaGaJaGai】「カササギ」[(Ek) *saksa*「(水鳥の)サクサ」。(N), (Oc), (Ul), (Ut), (Na), (Ma)にあり、I群の言語以外ではもっぱら「カササギ」を指す。{P.Mo} *sayajiyai*「カササギ」があがっている。なおトルコ語で *saksagan* である（竹内 (1989: 324)）。これらの語形はこの鳥の鳴き声に由来する可能性も考えられる。]、**mangias**【manggir】「山葱」[(Ek: Nrch, K) *mañehun*「野生の葱」のみにあり、{P.Mo} *mangir, manggisu(n)*「野生の葱」があがっている。]、**čoloo**【čilaGu】「石」[(Ek) *jolo*. (J)以外の全ツングースにあるが、{P.Mo} *čilagun*があがっている。しかも大竹 (2013: 7) によれば、第2音節に長母音を持つ点で、例外的ながらも規則的な対応を示している語である。したがってモンゴル祖語に遡る語であると考えられる。]、**həin**【kei】「風」[(Ek) *ədin*。全ツングースにある、{P.Mo}の語形はあがっていない¹¹。ツングースと対応するとすれば、-d-の脱落を考えなければならない。偶然の類似とみるべきものかもしれない。孫竹主編 (1990: 591) によれば、【kei】に由来すると思われる *kəi, ki* などの語形が東部裕固語、土族語、東郷語、保安語にみられる。]

・より抽象的な意味の語彙

antaa【amta】「飴、甘い(幼児語)」[(Ek) *amta*「味」。全ツングースにあるが、{P.Mo} *amtan* etc.「味」がある。]、**arag**【arG-a】「方法、意見」[(Ek) *arga*「可能性」。(Ew), (N)以外の全ツングースにあるが、{P.Mo} *arya*「方法 etc.」があがっている。]、**duli**【düli】「真ん中、半分」[(Ek) *dulin*。全ツングースにあって、意味も形もほぼ一致している。他方、{P.Mo} *duli*「中間の」¹²もあがっている。]、**dur**【düri】「姿、容貌、模様」[(Ek) *durun*「模様」。(Ew), (J)以外の全ツングースにあるが、{P.Mo} *düri*「様子、外見、姿、形」も

¹⁰ 査読者から御指摘をいただいたが、Tsintsius et al. (1977) での {P.Mo} の語形は *erekei* であるものの、対応するのは *quruGu-n* (小澤 (1983: 499)) であろう。

¹¹ 【kei】と *ədin* では対応しないと考えたため、あげなかったものと考えられる。

¹² ただし小澤 (1983: 146) によれば、*dul(en)*「〔後置詞〕～を通して、～を徹して、～の間」とあり、「中間の」という意味では用いられないようである。査読者の御教示による。

あがっている。], **gəgəə** [gege] 「光」[(Ek) *ŋəərii*。全ツングースにあるが、{P.Mo} *gegegen* 「光 etc.」があがっている。], **jəblon** [jəbalang] 「苦難、孝心」[(Ek) *jəyər* 「貧乏」。全ツングースにある。しかし形・意味共にもっともよく対応するのは(Ma) *jəbolon* 「悲しみ、心配、苦しみ、不幸 etc.」である。{P.Mo} *jəba-* 「苦しむ」も比較されている。], **kooli** [qauli] 「法、法律、規律」[(Ul) *kaali*, (Na), (Ma), (J)にあり、{P.Mo} *xauli* 「法」や漢語「規矩 *gui¹lie⁴*」が比較されている。漢語からモンゴル語や満洲語に入り、さらに満洲語からアムール沿いに下流へ広がったものではないだろうか。], **kuč** [kücü] 「力」[(Ek) *kusii-* 「格闘する」。 (Oc)以外の全ツングースにあって、もっぱら「力」の意であるが、{P.Mo} *küčün* 「力」があがっている。], **šigə** [siGui] 「密林」[(Ek) *siyii* 「密林、茂み」。 (S), (J)以外の全ツングースにあるが、{P.Mo} *siyui* 「小さな林、密林」があがっている。], **wəil** 「労働」【**üile**】[(Ek) *uləhit* 「労働者」。 (Ek), (Ew), (Ul), (Ut), (Na), (Ma), (J)にあり、(Ek), (Ew)には{Jak}より、(Ul), (Ut), (Na)には<(Ma)<(Mo)と注記がある。{P.Mo} *üile* 「用事、労働」があがっている。], **konoo** 「一昼夜」、**konoor** 「期限」【**qonoG**】[(Ek) *konuk* 「一昼夜」, (S), (Ew)にあり、(S)には(Mo)より、(Ek)および(Ew)には{Jak}よりと注記されている。{P.Mo} *xonu-* 「泊まる」があがっている。], **sanaa** 「思想、意図」【**sanaG-a**】[(Ek) *sanaa* 「考え」, (S)にのみある。(Ek)には{Jak}より、(S)には(Mo)よりと注記されている。{P.Mo} *sana-* 「考える」があがっている。]

次の語は、{P.Mo}の語形があがっていないものの、ツングース諸語における分布の偏りからみて、モンゴル諸語よりツングース諸語に入ったものと考えられる。

dalj [dalji] 「関係」(Na), (Ma)にあるが、特に{P.Mo}の語形などはあがっていない。]

・より進んだ文化や文明、異なった文化との関連が考えられる語彙

argi [ariki] 「酒」[(Ek) *arakii*。 (J)以外の全ツングースにあるが、{P.Mo} *araki* 「酒」があがっている。], **barkan** [burqan] 「神、仏」[(Ek) *burkaan*。 (S), (Oc), (Na)にあるが、{P.Mo} *burxan* があがっている。], **budaa** [budaG-a] 「食事、食べ物」[(Ek) *buda* 「(脱穀した)キビ」。 (N), (Oc), (Ul), (Ut), (Na), (Ma), (J)にあるが、{P.Mo} *budaya* 「粥」があがっている。], **gokoo** [goq-a] 「鉤」[(Ek) *goko*。 (S), (Ew), (U)以外のツングース諸語にあるが、{P.Mo} *yoXu* 「鉤」があがっている。], **sarp** 「箸」【**sabq-a**】[(S) *sarpa*。 (Ek), (Ew)以外の全ツングースにあるが、{P.Mo} *sabxa* も比較されている。(Ek), (Ew)にないので、ツングース本来の語ではなく、モンゴル諸語から入ったものと考えたい。メタセシスを含む音の対応もツングース諸語内部での対応規則に合っていない。ただし(J)にあるので、モンゴル諸語から入ったにしてもかなり古い時代のことと考えられる。], **toli** 「シャーマンの用いる青銅の鏡、鋤の金属板」【**toli-n**】[(Ek) *tooleen-toleŋ*, (S), (N), (Ul), (Ut), (Na), (Ma)に分布する。うち(Ek)の形式はモンゴル語からの借用と記されている。{P.Mo} *toli(n)* 「鏡、金属板」が比較されており、モンゴル語から満洲語に入り、アムール下流へ広まったものだろう。], **mungu** [mōnggü] 「銀」[(Ek) *məŋun*。全ツングースにあるが、{P.Mo} *mōnggün* があがっている。], **čaas** [čaGasu] 「紙」[(Ek) *čalban* 「白樺」。全ツングースにあるが、{P.Mo} *čayalsu(n)~čayarsu(n)~čayasu(n)* があがっている。], **šil** [šölü] 「肉のスープ」[(Ek) *silə*。 (J)以外の全ツングースにあるが、{P.Mo} *šilün* があがっている。], **tərag** [terge] 「車」[(Ek) *təragə* 「四輪荷馬車」。 (S), (Ma)にのみあるが、{P.Mo} *terge(n)* があがっている。]

3.4.2. 動詞類

bodbai 【*bodu-*】「考える、計算する」[(Ek) *bodo-*。(Ew), (N), (J)以外の全ツングースにあるが、{P.Mo} *bodu-*があがっている。]、**dawaa** 【*dabaG-a*】「峠」、**dawaabai** 【*daba-*】「越える」[(Ek) *dawa-*「峠を越える」。(S), (J)以外の全ツングースにあがっているが、{P.Mo} *daba-*「横切る」があがっている。]、**kərčbai** 【*kerči-*】「切る」[(Ek) *kərči-*「切る、細かく刻む」, (N), (Ul), (Ut), (Na), (Ma)にあるが、{P.Mo} *kərči-*「切る、細かく刻む」があがっている。]、**maltbai** 【*malta-*】「掻き集める、掘る」[(Ek) *malta-*, (S), (Ma)にのみあり、{P.Mo} *malta-*「掘る」があがっている。]、**milkubai** 【*mölkü-*】「這う」[(Ek) *mirki-*「這う」。全ツングースにあるが、{P.Mo} *moyai*「ヘビ」, *mölkü-*「這う」があがっている。]、**oĵbai** 【*oĵu-*】「キスする」[(U) *oĵo-*, (Na), (Ma)にのみあり、*oĵi~oĵu-*があがっている。]、**onobai** 【*unu-*】「騎乗する」[(Ek) *uy-/k-*。(Ew), (J)以外の全ツングースにあるが、{P.Mo} *unu-*があがっている。]、**tanibai** 【*tani-*】「見知っている」、**tanil** 【*tanil*】「知っている人」、**tanilčbai** 【*tanilča-*】「互いに知っている」[(Ek) *taay-*。(J)以外の全ツングースにあるが、{P.Mo} *taɣa-*「言い当てる、予感を感じる」があがっている¹³。]、**jadarbai** 【*yadara-*】「疲れる」[(Ek) *jadakuu*「貧乏な」。(Ew), (Ut), (J)以外の全ツングースにあるが、{P.Mo} *jada-*「できない、苦しむ」があがっている¹⁴。]

3.4.3. 形容詞類および副詞類

balai 【*balai*】「盲の」[(Ek) *bali*。(S)以外の全ツングースにあるが、{P.Mo} *balai*「盲目の」があがっている¹⁵。]、**bajin** 【*bayan*】「金持ちの、裕福な」[(Ek) *bajan*。(Ew)以外の全ツングースにあるが、{P.Mo} *bajan*があがっている。]、**ərd** 【*erte*】「早い」[(Ek) *ərdə*「朝早く」, (S), (Ew), (Na), (Ma), (J)にあるが、{P.Mo} *erte*「早い」があがっている。]、**hairan** 【*qayir-a*】「惜しい、もったいない」[(Ek) *kajree*「残念だ!」。(N), (Ut), (J)を除くツングース諸語にあるが、{P.Mo} *xaira*, *xairalal*「愛、残念、憐れみ」があがっている。]、**katuu** 【*qataGu*】「難しい、(値段が)高い」、**katan** 【*qataGu*】「硬い、強い、健康な、厳格な」[(Ek) *kataa-*「金属に焼きを入れる」。(U)以外の全ツングースにあるが、意味は主に「硬い」などを中心としたさまざまな意味で、ダグール語と良く対応した意味を示す語が(Ek), (S), (Ma)などにも見当たらない。他方、{P.Mo}をはじめとするモンゴル語の諸形があがっている。]、**kəčuu** 【*kečegüü*】「ひどい、困難な」[(Ek) *kəta*「多い」, (Oc), (U)*kətu*, (Ul), (Ut), (Na)*kətu*にあり、「多い」、「あやうく(～するところだった)」、「とても」などの意であるが、{P.Mo} *ketü*「あまりに～だ」があがっている。]、**largian** 【*narGiyan*】「複雑な、面倒くさい」[(Ek) *largii*「無秩序」, (Ul), (Na), (Ma)にあり、特に{P.Mo}などの形式はあげられていないが、語頭に *l* があって、ツングース諸語らしい形をしていない。]、**bonbor** 【*bömbüge-n*】「丸々としている」[(Ek) *bumbukəə*「球」, (U), (Na), (Ma)

¹³ **tanibei** 自体は{P.Mo} *taɣa-*「言い当てる、予感を感じる」ではなく、{M} *tani-* {P.Mo} *tani-*「知る、知り合いである、わかる、識別する」(小澤 (1983: 360)) と対応するものと考えられる。査読者の御教示による。

¹⁴ **jadarbei** 自体は {P.Mo} *jada-*「できない、苦しむ」ではなく、{M} *jadra-* {P.Mo} *yadara-*「疲れる、あきる、など」(小澤 (1983: 667)) と対応するものと考えられる。査読者の御教示による。

¹⁵ 「盲目の」の意は、少なくとも現在のモンゴル諸語では{M} *soxor* {P.Mo} *soqur* (小澤 (1983: 335)) およびその同語源語がもっぱら使われている(孫竹 (1990: 608))。したがって{P.Mo} *balai* がツングース諸語からの借用である可能性も十分に考えられる。査読者の御教示による。

にある。{Bur} *bümbəgə* 「球」、*bümbəgər* 「球のような、丸い」があがっている。これもやはり擬音語・擬態語的要素がモンゴル諸語からツングース諸語にもたらされたものと考えられよう。]

3.4.4. 古い時代にむしろツングース諸語からモンゴル諸語へ入った可能性が考えられるもの

上記のように、このモンゴル文語の対応形が記されている語彙 (D.) は、基本的にそのほとんどがモンゴル諸語からツングース諸語に入ったものとみてよさそうである。しかし一部の語彙については Tsintsius et al. (1975, 1977) に {P.Mo} の記載がなく、全ツングースに分布してかなり基本的な意味を持っているため、むしろツングース諸語からモンゴル諸語に入ったとみるべき語が見出された。

dərdbəi 【degde-】「飛ぶ」、**dəgii** 【takiy-a】「鳥」[(Ek) dəy- 「飛ぶ」。 (Ek) dəyii 「鳥 (一般名称)」について、Tsintsius et al. (1975) はこれを dəy- 「飛ぶ」からの派生語とみている。dəy- 「飛ぶ」の同源語は全ツングースにあるが、{P.Mo} *dəgdə*- 「飛び立つ、上がる」があがっている¹⁶。dəgii 「鳥」自体はツングース、おそらくエウエンキー語からダグール語が借用したものと考えられる。なおダグール語では -gd- > -rd- の変化が起きたと考えられるので、dərdb- 「飛ぶ」は少なくともダグール語でその変化の起きる以前から存在していたことになる。]、**daram** 【daram-a】「腰」[(Ek) *darama*。全ツングースにあり、特に {P.Mo} の語形などはあがっていない。小澤 (1983: 128) には *daram* (*daruma*) 「動物の背中部分」があがっている。]、**salaa** 【salaG-a】「分岐、二股」[(Ek) *halan* 「二股の枝、分岐点」。 (Ew), (S), (J) 以外の全ツングースにあり、{P.Mo} についての記載が無い¹⁷。 (Ul) *paala(n)*, (Na) *paalaa*, (Ma) *fasalan*, と、語頭音の対応が見られるので、これはツングース祖語に遡る要素と考えられる。]、**mataa** 【mata- 「折り曲げる」】「円形の白樺製容器」[(Ul) *mataxa* 「深くない白樺製容器」, (Na) にのみある。{P.Mo} などの形式は上がっていないが、{Jak} *batama~matana* etc. 「(魚皮の) 袋」が比較されている。]

3.4.6. モンゴル諸語からソロン語のみに入ったと考えられるもの

ソロン語はダグール語との接触期間が長かったと考えられるうえ、現在もダグール語やモンゴル語諸方言の影響を大きく受けている状況にある。したがって他のツングース諸語には見られないが、ソロン語にのみダグール語をはじめとするモンゴル諸語から入ったと思われる語が存在する。こうした語彙については、Tsintsius et al. (1975, 1977) にそもそも記載が無い場合もある。ソロン語の語形については、主に風間・トヤー (2011)

¹⁶ dəy- 「飛ぶ」がツングース祖語に遡ることは間違いないが、{M} *degdeexij* {P. Mo} *degdekei* 「羽の生えかかっている鶏の雛」(小澤 (1983: 151)) のような派生語があるので、借用語であるとすればかなり古い時期のものである可能性がある。

¹⁷ Tsintsius et al. (1977) はあげていないが、{M} *salaa(n)*, {P. Mo} *salaG-a-n* 「脇枝、分岐点、など」(小澤 (1983: 322)) という語がある。V-aa / V-ee という形の派生名詞はモンゴル諸語において一般的に見られるものであるという (*dab-aa* 「峠 (越える-aa)」, *id-ee* 「食べ物 (食べる-ee)」など)。ブリヤート語には *s > h の変化を経た対応形 *halaan* があり、エウエンキー語の語形に一致する。したがってエウエンキー語の語形に関してはブリヤート語から入った可能性も考えられる。以上、査読者からの御教示による。

にあげた形を《 》に示した。ただし一部の《 》の語形には、筆者が現地で確認したものの、まだ発表していない語形も含まれる。

mangil「額」【**mangnai**】《**maŋgɪl**》[(S) *maŋɪl* があるのみ。(Mo)より注記があり、{P.Mo} *manglai* があがっている。]、**olor**「人々」【**olus**】《**ɔlar**》[(S) *olor~olur* があるのみ。(Mo)よりと注記があり、{P.Mo} *ulus*「国家、人々」があがっている。しかし *s > r* の変化はモンゴル諸語の中でも特にダグール語に起きたものと考えられるので、直接にはダグール語よりソロン語に、しかもこの音変化があった後に入ったものとみなす必要がある。]、**kəragə**「用途」【**kereg**】《**xərag**》[(Ek) *kəray*「用事」があるのみ。{P.Mo} *kereg*「用事、必要」があがっている。トルコ語に *gerek*「～がいる、必要である」(竹内 (1989: 146))があり、したがってこの語はトルコ語で *k > g* の変化が起こる以前にチュルク諸語にも入っている。この語の語末の *g* は、*biči-g*「書物」にあるのと同じ名詞形成接辞と考えられる(山越康裕 p.c.)ので、この語はモンゴルが起源であると考えたい。]、**aruun**「清潔な」【**ariGun**】《**arukkun**》[記載なし]、**ədəə**「今」【**edüge**】《**ədəə**》[記載なし]、**gaibii**「良い」【**GayiGui**】《**gor**》[記載なし]、**oriə**「夕方、遅くに」【**orui**】《**oree**》[記載なし]、**šurkul**【**čidkür**】「幽霊」《**šukkəl**》[記載なし]、**ungu**【**öngge**】「色」《**uŋgu**》[記載なし]

3.5. 「満洲語:」の記載のあるもの (E.)

恩和巴图等編 (1984) には「満洲語:」と記載のある語彙がかなり多数存在する。筆者の満洲語に関する知識不足もあり、今回これらを全部詳細に検討することはできなかった。こうした語彙の中には、ナーナイ語やウデヘ語など、筆者になじみの深い言語でも良く使用される語彙も散見された。この節ではそのような語彙をピックアップして下記に示した。これらの語彙には、ツングース祖語に遡るものと、満洲語に固有の語彙だが、満洲語からアムール下流域へ広まったものが含まれているものと考えられる。より南に分布すると思われる動植物や、抽象的な意味の語彙などが多くみられる。

・名詞類

bilgaar「のど、管」、**gaawu**「カラス」、**monio**「サル、干支の申」、**itən**「二歳の牛」、**ənəən**「メス、メスのニワトリ」、**suar**「ノミ」、**koldoon**「チョウセンゴヨウ」、**orwoidaa**「朝鮮人参」、**ilgaa**「花、花びら、天然痘」、**ardii**「雷」、**juku**「凍った場所」、**giad**「槍」、**saran**「傘」、**jigaa**「お金」、**jak**「物」、**anaku**「錠前」、**əškəə**「叔父、父の父方のいところで父より年少の者」、**omol**「孫、弟／妹の子」、**səb**「先生」、**amban**「大臣、重臣」、**gərən**「衆人、みんな」、**hal**「姓、氏族」、**gurun**「国」【**gürün**】、**niakan**「漢族、漢人」、**koton**「街」【**qota**】、**bait**「事、問題、案件」、**banig**「感謝」、**durun**「(服や靴の) 形、手本、見本、典型、規定、道理、標準」、**ənduur**「神」、**ərgən**「生命」、**gašaən**「いなか、村落」【**GačaG-a**】、**giaan**「道理、理由、原則」、**kačın**「種類」、**mugdəən**「発展」、**səbjın**「楽しみ」、**tačın**「教養、作法」、**tačku**「学校」、**mudaan**「回、回数」、**ərin**「時間、時期、時代」、**təni**「たった今」、**juaartən**「夏至」、**aniə**「旧暦の正月」、**aniəbiə**「一月」、**jalanbiə**「(陰暦の) 三月」、**ningunbiə**「(陰暦の) 六月」、**nadanbiə**「(陰暦の) 七月」、**jakunbiə**「(陰暦の) 八月」、**ujinbiə**「(陰暦の) 九月」、**juanbiə**「(陰暦の) 十月」、**nadarmaan**

「7本に枝分かれしたシカの角」

・動詞類

aišilbāi「手伝う、助ける」、**banjibuubāi**「準備する、創作する」、**banjinabāi**「生産する」、**atbāi**「勝つ」、**takurbāi**「使う、派遣する」、**tačbāi**「教える」、**pančbāi**「怒る」、**sonjbāi**「選ぶ」、**dəribuubāi**「始める、始まる」、**doolonku**「タカのとまる場所（<doo-「降りる」）」、**batbāi**「猟で獲る」、**bataal**「狩猟」、**bataačin**「狩猟する者」

・形容詞・副詞類

tond「まっすぐな、忠実な」、**tondookon**「まっすぐな」、**tulgian**「外、外の、特殊な」、**ənču**「違う、別の」、**jal**「一杯の、満杯の」、**banjtii**「生まれつきの」、**sardia**「老いた」、**daa**「もともとの、本来の」、**ələwun**「お腹がいっぱいの」、**səbjintii**「楽しい」、**jiə** **jiəč**「次の、第二の」、**əlii**「さらに」、**nə**「今、今の」、**umai**「全く、決して」、**utkai**「すなわち」

上記の語のうち、特に **ardii**「雷」、**sardia**「老いた」に注目したい。これらのツングース諸語における形は、「雷」(Ek) **agdii** || (U) **agdi** || (Na) **agji** || (Ma) **agjan**、「老いた」(Ek) **sagdii** || (U) **sagdi**「大きい」|| (Na) **sagji** || (Ma) **sakda**「老人」、である。したがってこれらの語は、ダグール語で **-gd-** > **-rd-** の変化が起きる前に満洲語からダグール語に借用されたことが分かる。

同様に **giad**「槍」と **niakan**「漢族、漢人」に関しても、「槍」(Ek) **gida** || (U) **gida** || (Na) **gida** || (Ma) **gida**、「漢族、漢人」(U) **niŋka** || (Na) **nikan** || (Ma) **nikan**、であるので、ダグール語で「iの折れ」（と呼ばれる母音の逆行同化現象）が起こる以前に借用されたものとみることができる。なお{M} **jad**, {P. Mo} **jida**「槍、銃剣」（小澤（1983: 162））であるため、ダグール語以外のモンゴル諸語には、もっと以前にツングース諸語から入った可能性が考えられる。

3.6. 「漢語:」と記載があるが、満洲語経由でナーナイ語やウデヘ語にも借用されたと考えられるもの（F. の一部）

下記の語も、筆者がナーナイ語やウルチャ語、ウデヘ語の調査の中で聞いたり書き取ったりしたことのある語である。満洲語経由でアムール下流域に広まったものと考えられる。

bandən「腰掛け」【**bandang**】、**biənš**「餃子」【**bansi**】、**daajaan**「アヘン」、**jangjun**「將軍、武將」、**jangoid**「支配人、店主、男の主人」、**kəudii**「袋」、**koo**「徳利」、**pijaan**「箱」、**čuidun**「マッチ」【**čüidəng**】、**giaa**「街」、**tunšilbāi**「翻訳する」、**ganjin**「清潔な、きれいな」、**bai**「ただの、無償の」

3.7. エウエンキー語諸方言における分布

十分に行えたとは言えないかもしれないが、エウエンキー語諸方言における分布につ

いてある程度のデータを得ることができた。ここではどの方言について記載があったかを整理し、ダグールが接触していたエウエンキーがどこの方言の話者たちであったか、ダグールの故地はどこであったのかについて考察する。

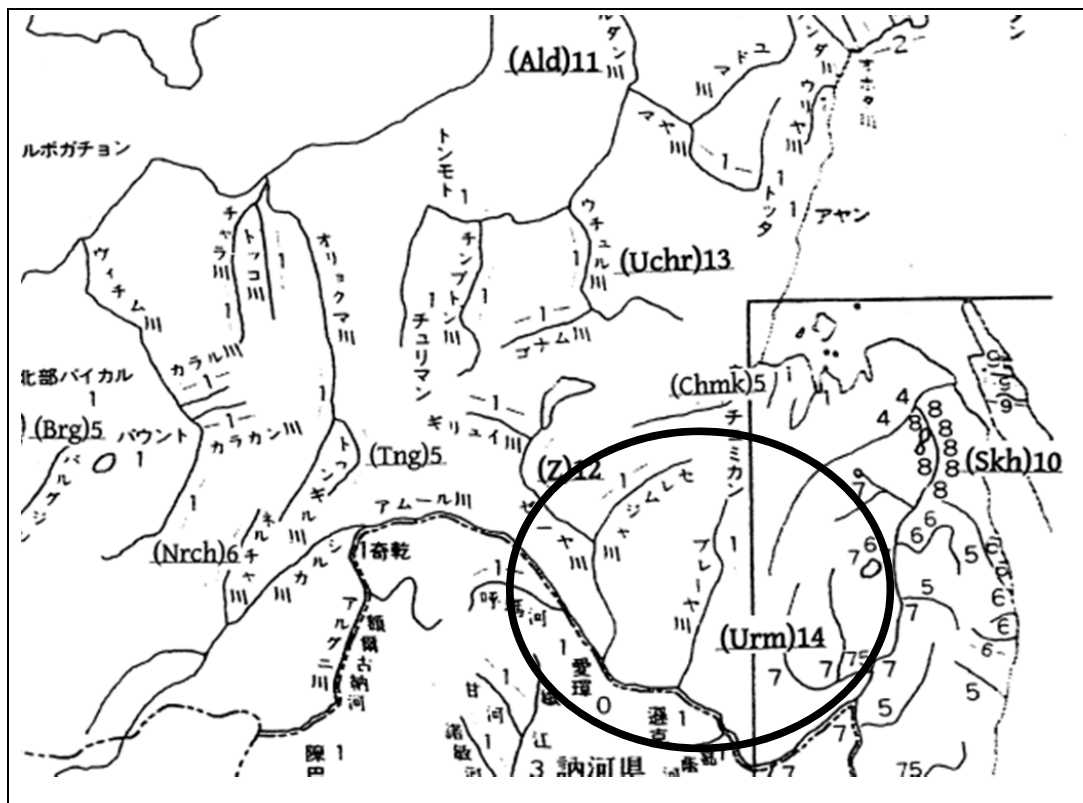
エウエンキー語各諸方言の出現数は下記のようにであった (()内の数値)。なお数値が5以上の方言には下線を付し、10以上の方言は下線と太字で示した。

北方言 : Ag アガティ・バリショイパローガ(0); D ドウジン(0); E エルボガチャン(3); I イリンピ(1); Nak ナカンノフ(1)

南方言 : B バイキット(0); Bnt バウントフ(0); Brg バルグジン(5); V ワナワル(0); V-L ヴェルホレンスク(3); N ネプ(4); P-T ポドカーメンナヤ ツングースカ(7); S スィム(4); Tkm トクミン(0); U ウチャム(0)

東方言 : A アヤン(1); Ald アルダン(11); V-Am アムール上流(0); VI ヴィリュイ(0); Vtm ヴィチム(0); Z ゼーヤ(12); Kch カチュグ(1); M マイ(2); Nrch ネルチン(6); Olkm オリョクミン(0); Skh サハリン(10); Tk トッキン(1); Tmt トンモット(1); Tng トウンギル(5); Tp テインプトン(1); Tt トッティン(2); Urm ウルミ(14); Uchr ウチュル(13); Khng ヒンガン(3); Chlm チュリマン(3); Chmk チュミカン(5)

下線の諸方言を地図に投影すれば以下の如くであった (ポドカーメンナヤ ツングースカ方言のみを省略した)。



地図 2: ダグール語との共通語彙要素を多く有するエウエンキー語の諸方言(池上 (1989: 1060)をもとに作成した)

上記のデータから下記のように推定したい。すなわち、ダグールはかつてアムール河左岸のうち、ゼーヤ川、ブレーヤ川、ウルミ川などの支流が流れ込む地域に分布していた。ダグールはそこでエウエンキー語の諸方言と接触していたが、その後、「0. はじめに」で見たような歴史的背景から南下した。他方、ダグールと接触していたエウエンキーはその後、北はアルダン川流域、東はサハリンへと分布を拡大した。

なお10以上の共通要素が見られた5つの方言全てに共通していた語彙は、**aošia**「姉の夫」、**tatandaa**「狩猟の長、野営の長」、**jalarmaan**「3本に枝分かれしたシカの角」、**aĭin**「主人、皇帝」、**baraan**「多い」の5単語、4つの方言に共通していたのは、**dəraən**「水源地、上流」、**gisoor**「シャーマンのタイコのパチ」の2単語であった。これらの語彙が上記のダグールの故地でエウエンキーやソロンと共有されていたものと考えられる。

3.8. その他

solwoi【**solugai**】「左側の」に関しては、トルコ語に(Tr) sol「左(の)」(竹内(1989: 342))がある。Öztopçu et al. (1996) をみると、カザフ語やウイグル語など、広くチュルク諸語に同語源語が見出されることから、この語はチュルク祖語に遡るものと考えられる。小澤(1983)にも **solgoi**【**soluyai**】があがっているので、ダグール語が分岐する以前にチュルクからモンゴルにもたらされた語彙である可能性が考えられる。

təətər「あれ(やや遠いものを指す)」に関して、ツングースでもより遠いものを指す時に、(Ut) **taatari**「あれ(遠くの)、あの」(池上(1997: 197))のような語構成の語が用いられる。ブリヤート語では **tereeter**、モンゴル語では **tertee**「ずっと向こうの」のような語形が用いられるという(査読者の御教示による)。このような語構成に関してもモンゴル、ツングースのいずれか一方から他方へ影響が及んだことも考えられよう。

4. 考察のまとめ

ダグール語はブリヤート語とともに、モンゴル諸語の中ではもっとも東に位置し、古くからツングース諸語との接触があったことが考えられる。今回の検討によって、かなり基本的な意味の語彙に至るまで相互に大量の借用のあったことが明らかになった。

ダグール語がツングース諸語から借用した語彙には、身体部位名称、親族名称・地位名称、動植物や地形の名称、狩猟やシャーマニズムに関する名称などが多く見出された。

他方、ツングース諸語がダグール語をはじめとするモンゴル諸語から借用した語彙には、抽象的な意味の語彙や、進んだ文化要素や異なった文化要素の流入として考えられる語彙が多く見出された。擬音語・擬態語もかなり入ったのではないかと考えられる。

わずかではあるが、(Na K-U)・(Hz)・(Na B-K)からなるアムール河中流域言語圏との接触を示す語彙も観察された。

さらにダグールが接触していたエウエンキーの方言の分布を検討することにより、両者の接触の地域や、ダグールの故地についても推定を行った。

5. 今後の課題

今回はもっぱら借用と言う観点からのみ、ダグール語とツングース諸語に共通する語

彙要素を扱った。「体」、「腰」、「へび」、「這う」、「飛ぶ」、「石」、「力」、「盲目の」、などの語彙はきわめて基本的な語彙であるので、むしろ借用よりも同語源に遡る可能性、つまり「アルタイ語族」の系統関係を証明する要素と考えるべきなのかもしれない。またこうした観点からの諸先行研究による指摘がすでにあることも考えられるが、今回こうした先行研究をよく検討する時間がなかった。今後の課題としたい。

ただ対応する語彙とするためには、むしろあまり似ていない形の間に、いくつかの語彙に共通して観察されるような音対応が見いだされなければならないものと考えられる。今回検討した語彙には少なくともそのような対応は見いだされなかった。

【謝辞】

ダグール語の現地調査への道を開いてくださった方々、調査に応じて下さったコンサルタントの方々に深く感謝申し上げたい。本稿には現地調査の成果は直接反映されていないが、現地で実際にダグール語を聞き、基礎語彙を調査する中でツングース諸語と共通する語彙に目を開かれたことが本稿執筆の動機となったことは間違いがない。

ていねいに査読して下さい、多くの貴重なコメントを下された査読者の先生方にも深く感謝申し上げたい。モンゴル諸語に不案内な筆者にとって、いただいたコメントに基づき修正・加筆した部分は多かった。記して感謝申し上げる次第である。

参考文献

恩和巴图

- 1983 『达汉小辞典』、呼和浩特：内蒙古人民出版社 (*DAOR NIAKAN BULKU BITEG*).

恩和巴图等编

- 1984 『达斡尔语词汇』蒙古语族语言方言研究丛书 005 呼和浩特：内蒙古人民出版社.

恩和巴图編

- 1988 『达斡尔语和蒙古語』蒙古语族语言方言研究丛书 004 呼和浩特：内蒙古人民出版社.

Ikegami, J.

- 1979 Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprachen, *Sprache, Geschichte und Kultur der altaischen Völker*, Berlin: Akademie-Verlag.

池上二良

- 1989 「ツングース諸語」『言語学大辞典 世界言語編 第2巻』, 1058-1083 東京：三省堂.

- 1997 『ウイльта語辞典』札幌：北海道大学図書刊行会.

風間伸次郎

- 1996 「ヘジェン語の系統的位罫について」『言語研究』第109号：117-139, 日本言語学会.

風間伸次郎・トヤー共編

- 2011 『ソロン語基礎語彙』府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

栗林均

- 1989 「ダグル語」『言語学大辞典 世界言語編 第2巻』, 597-603 東京：三省堂.

小澤重男

- 1983 『現代モンゴル語辞典』東京：大学書林.

大竹昌巳

- 2013 「ダグール語音韻史の再構成」『KOTONHA』124. 1-13.

Öztopçu, Kurtuluş, Zhoumagaly Abuov, Nasir Kambarov and Youssef Azemoun

- 1996 *Dictionary of the Turkic languages*. London and New York: Routledge.

Sem, L. I.

- 1976 *Očerki dialektov Nanajского jazyka Bikinskij (ussurijskij) dialekt*. Leningrad: Nauka.

孙竹 主編

- 1990 『蒙古语族语源词典』照那斯图・陈乃雄・吴俊峰・李克郁編著. 西宁：青海人民出版社.

竹内和夫

- 1989 『トルコ語辞典』東京：大学書林.

Tsintsius, V. I. et al.

- 1975, 1977 *Sravnitel'nyj slovar' tunguso-man'chzhurskikh jazykov, Materily k etimologičeskomu slovarju*, tom 1, 2. Leningrad: Nauka.

津曲敏郎

- 1996 「中国・ロシアのツングース諸語」『言語研究』110: 177-190.

柳澤明

- 2009 「7.2 多民族国家の構造」岡洋樹・境田清隆・佐々木史郎編『朝倉世界地理講座 — 大地と人間の物語— 2 東北アジア』243-253, 東京：朝倉書店.

On the common lexical elements between Tungusic and Dagur

Shinjiro KAZAMA

Tokyo University of Foreign Studies

Dagur is one of the Mongolic languages which had been in contact with Tungusic from the oldest period. In this paper I examine common lexical elements between Dagur and Tungusic, and try to decide whether these elements are 1. from Mongolic to Tungusic, or 2. from Tungusic to Mongolic. Through the examination on these elements I consider the homeland of Dagur and the history of the contacts between Mongolic and Tungusic.

First, I extract common lexical elements with Tungusic from Enhebatu (1983) and Enhebatu et al. (eds.) (1984) (Dagur dictionaries). And I divided those common lexical elements into the following 6 groups:

- A. The words noted as from Solon;
- B. The words noted as from Ewenki;
- C. The words without any notes about the borrowing source and without the corresponding Mongolian literary forms;
- D. The words without any notes about the borrowing source and with the corresponding Mongolian literary forms;
- E. The words noted as from Manchu;
- F. The words noted as from Chinese

In conclusion, I point out the following points:

- (1) The words which Dagur borrowed from Tungusic are mainly found in the semantic domains of body-parts, families, plants, animals, hunting and shamanism.
- (2) The words which Tungusic borrowed from Mongolic consist of words with abstract meaning and of cultural elements. Onomatopoeia is also borrowed.
- (3) Some words are observed which illustrate the contact of Dagur with 'the Amur middle-basin linguistic area' (consisting of (Na K-U), (Hz) and (Na B-K), cf. Kazama (1996)).
- (4) On the problem of the Dagur homeland, according to the distribution of Ewenki dialects which have common elements with Dagur, I estimate the homeland as the left shore of the Amur around the Zeya, the Bureya and the Urmi river.